

中川八洋

Yatsuhiko Nakagawa

男系男子  
天皇を、  
奉戴せよ

# 女性天皇は 皇室廃絶

秋篠宮殿下に「男児誕生か!?」  
男系男子天皇だけが、皇統を救う!

女性天皇・女性宮家・女系天皇はすべて、皇統を  
自然的に消滅させる、天皇制廃止の劇薬である。

——皇位継承をめぐる国民の疑問のすべてに答える書。



のレベルは、学者くずれの売文業の故であろうか。  
 しかも、表2で示すように、宮家とは男系男子が当主であるの言う。女性当主は、「条件つき中継ぎ」であった桂宮家の第十一代の一例しかない。四宮家全体で五十二代あるうちの、二パーセントである。小堀と八木の「女性宮家論」は、伝統破壊の革命であって、「有識者会議」そのものである。

●表2 四世襲親王家（宮家）——「男子の皇胤」冷凍庫

宮家		創設	廃絶・臣籍降下	特記事項
伏見宮家	二四代	一三九八年	一九四七年	完全な実系・直系主義。
桂宮家	一一代	一五九〇年	一八八一年	第十一代が全宮家で唯一の女性当主。
有栖川宮家	一〇代	一六二五年	一九一三年	嗣子早世。高松宮家が祭祀を継承。
閑院宮家	七代	一七一〇年	一九四七年	一八七二年、六代からは伏見宮家系。

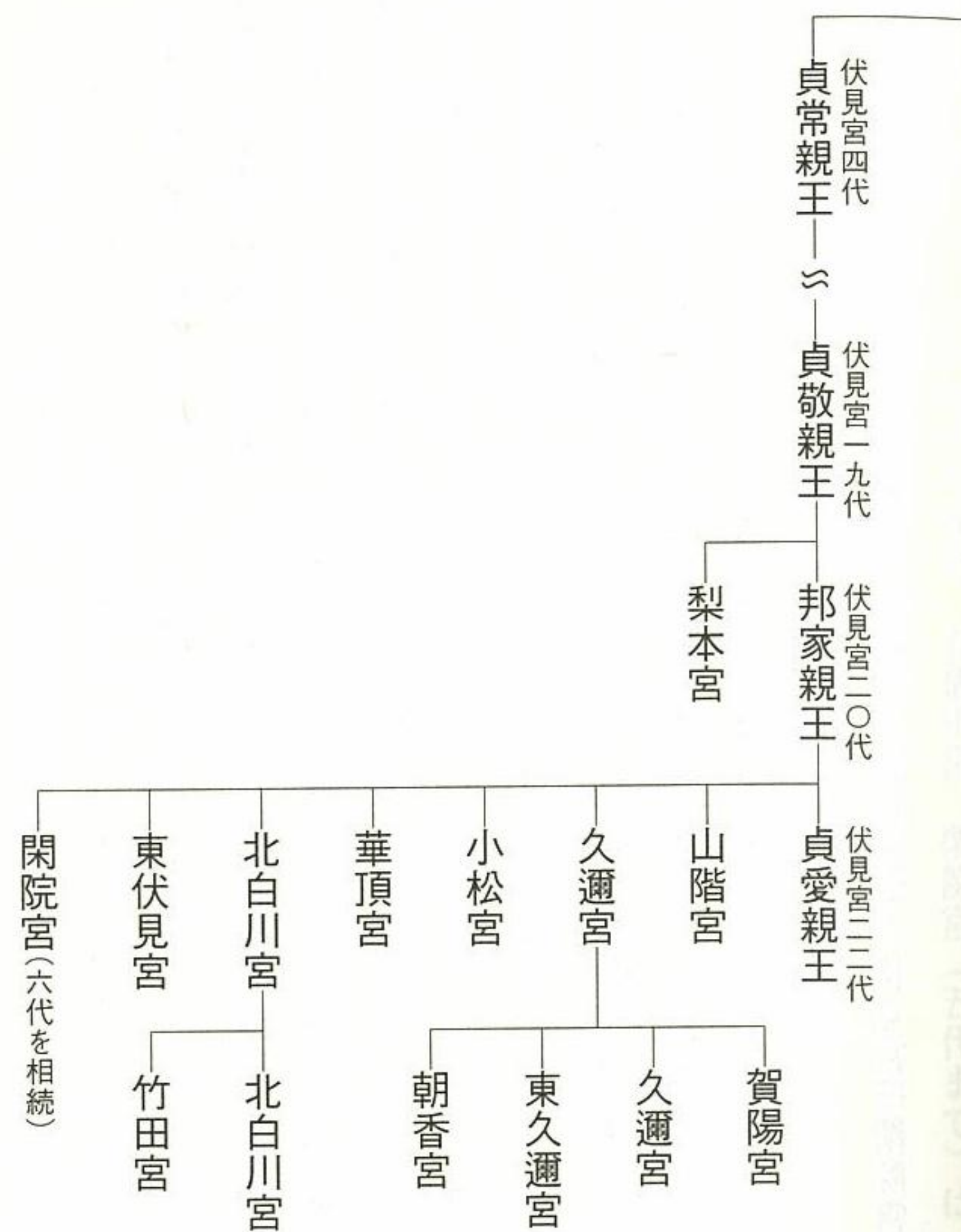
#### 第四節 「閑院宮家系（男子の皇胤）もし絶ゆる時は、伏見宮家系、大統を継ぐ」

——「傍系論」は、皇位継承「法」の破壊を狙う天皇制廃止勢力の詐言

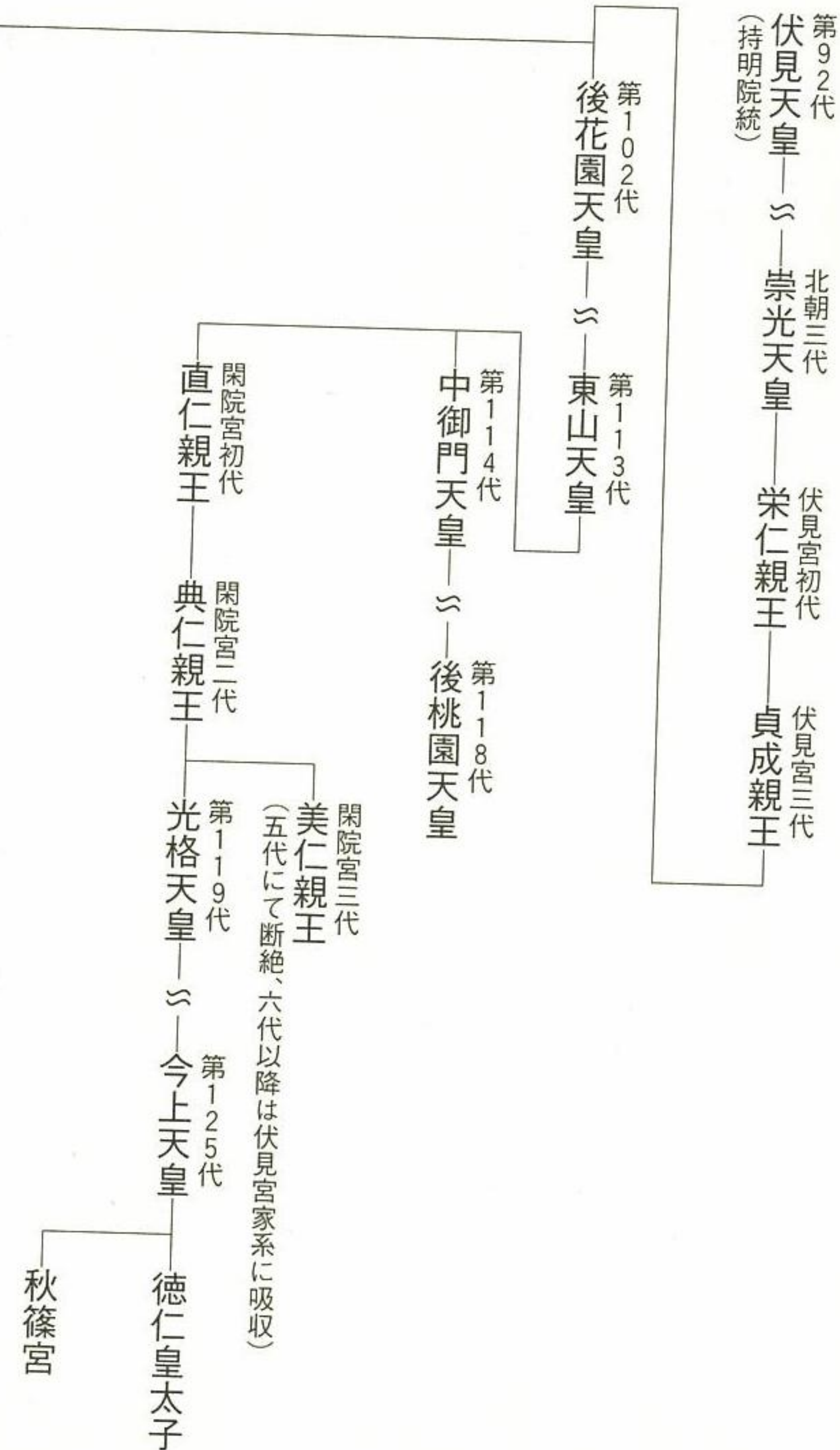
「旧十一宮家は全て北朝三代崇光天皇の皇子・栄仁親王に発した伏見宮の系統で、傍系として枝分かれしたのは六百年前のことです。現存する旧宮家の方々と今上天皇の家系は二十数世代・四十数親等も離れており、これは歴史上まったく前例のない（大傍系）といえるべきです」（注1、傍点中川）。

恥ずかしくなるほど噴飯物的な謬説である。なぜなら、後花園天皇（一〇二代）は、伏見宮家の出であって、伏見宮初代の孫に当たり、伏見宮家を本系とする。言い換えれば、伏見宮が先にあって、今上陛下（一二五代）に流れる後花園天皇以降の皇統の方は、その後の子孫である。伏見宮家（世襲親王家）は、正系の後花園天皇系と補系の貞常親王系に分統したのである。南北朝に似た一種の「二統」体制である。図4を参照されたい。





● 図4 閑院宮家系と同格か、それ以上の伏見宮家系





先に引用した一文は、水準が低く学者としていかがかと疑問視されている所功が語ったもので、「傍系として枝分かれした」との、明らかな間違いを犯している。閑院宮家や桂宮家あるいは有栖川宮家は、「枝わかれした傍系」といえるが、伏見宮家だけは、その逆である。「枝分かれした」のは、大統（天皇位、正系）の方だからである。

だから、江戸時代、世襲親王宮家が四つ——伏見宮、桂宮、有栖川宮、閑院宮——あったが、伏見宮家のみ、他の三宮家とは、別格であった。閑院宮家が五代をもって断絶したとき、それが伏見宮家系に吸収合併の形で移行となったのは、伏見宮家が「祖系」、武家的に言えば総本家であるからである。所功は「大傍系」などと平気で無知な言辞を吐くが、皇統史を知らない者の暴論である。民族系色の強い文体をもつ所功は、共産党系のジャーナリスト高橋紘と懇ろな関係にあるように、「無意識の極左」か、共産党員の偽装かの、奇妙な人物である。

話を戻して、桂宮などが断絶しても、そのまま放置され救済されなかったのは、世襲親王宮家の中で家格が低いこともあるが、実際には「正系」の男子男系の皇胤が絶えたときは、皇統は総本家の伏見宮系が継ぐ体制が完備していたからだろう。明治時代末になると、図に示したごとく、宮家は全て、伏見宮家の本家と分家ばかりである。一九四七年秋、皇籍を剥奪され臣籍に降下した十一宮家全ては、伏見宮家系の血統に属していた。この十一宮家とは、山階宮、賀陽宮、久邇宮、梨本宮、朝香宮、東久邇宮、竹田宮、北白川宮、伏見宮、閑院宮（六代以降）、東伏見宮、である。

もう一度いう。江戸時代の桂宮、有栖川宮、閑院宮（五代まで）は、今上陛下の「正系」に対し「傍系」といえる。しかし、伏見宮家系は、正系に対し「祖系」の立場にある。「正系の血統絶えたとき、伏見宮家系が大統を継ぐ」という皇位継承法が、一九四七年まで約五百五十年間堅持されたのは、それが北朝の男系男子の皇胤として「正統」だからである。つまり、旧皇族に關し、「今上陛下から〇〇親等も離れた遠縁」と看做すこと自体ナンセンスである。それ以上に、皇位継承の「法」を無視した謬説でもあるし、皇統の断絶を狙う天皇制廃止論者のドグマ（教義）である。「四十数親等も離れており」と見なす所功について、「天皇制廃止論者」と分類しておく方が賢明で正確だろう。

「正系にもしもことあるときは、伏見宮家系が大統を継ぐ」のが、皇位継承の「法」であるのに、「親等」のような矮小な物差しを持ち出してくるのは、この「法」を破壊せんとする革命家たちの論理である。詭弁である。共産党系が主力の「有識者会議」の資料も、次のように、この「法」を破らんとする狙いを露わにしている。

「親等では、貞成親王（崇光天皇の皇孫）を共通の祖先とすることから、今上天皇と皇籍離脱をした旧皇族とは、35〜37親等の隔たりがある」（注2）。

もう一度強調する。光格天皇に始まる今上陛下の（男子の）血統絶えるときは、伏見宮家系に



戻るのが六百年前に定まっている皇位継承の聖にして至高なるルールである。このルールを遵守する義務を果すべく、伏見宮家系の諸宮家は、今も立派に現存されている。

注

第一節

- 1、奥平康弘「天皇の世継ぎ問題がはらむもの——〈萬世一系〉と〈女帝〉論をめぐって」『論座』二〇〇四年八月号、七一〜二頁。
- 2、奥平康弘「コメンタール改憲論者の主張」、岩波ブックレット、六二〜三頁。
- 3、ラッセル『西洋哲学史3』、みずず書房、六二二頁。
- 4、奥平康弘「〈萬世一系〉の研究」、岩波書店、二〇〇五年三月、五〜六頁。
- 5、R. Filmer, *PATRIARCHA and OTHER WRITINGS* (edited by J. Sommerville), Cambridge University Press, p.35, p.41.
- 6、中野正志『女性天皇論』、朝日選書、一八三頁、一八四頁、二〇六頁。
- 7、『前衛』一九八六年三月号、一九四〜二〇三頁、に再録。
- 8、『皇室典範義解』、丸善、一四五〜六頁。

第二節

- 1、宮内庁『皇室制度史料 皇族三』第四章第一節、吉川弘文館、などを参照した。
- 2、日本学士院『皇室制度史』第三卷、吉川弘文館、四九頁。
- 3、蔵琢也「DNAから見た女性天皇問題」『VOICE』二〇〇五年五月号、一六六〜一七一頁。

第三節

- 1、『産経新聞』二〇〇五年十一月二十五日付、一面。
- 2、宮沢俊義メモ、『日本立法資料全集1 皇室典範』、信山社出版、七二頁。
- 3、『朝日新聞』二〇〇五年十一月二十五日付、二面。

第四節

- 1、『諸君！』二〇〇六年一月号、一三五頁。
- 2、有識者会議『報告書』、四一頁。